



碗久松山物語

三

~13
3916
3



門 13
號 3916
卷 3



柳巷話説卷之三

東都

曲亭

主人

編次

野崎浪速津小古主に逢ふ

鳥屋尾七郎二宛石宗達と伊勢へ久し後又七日あまの湯治

するに醫の瘡も愈へ彼地とて故郷へ飯るに城中の士平は

らるる妻子もろく宛塊らんと疑ひてさうぐりてものもゆり七

郎二も又の形勢と不審とまうらう人を説明して恙るれよとあら

す色バ七郎二が妻或ハ驚き或ハ泣きあつてものを物これバ七郎

二はくろく宗達が枉死を憐れ直ふ出仕して忍存に締の本末を告

るに忍存大ハ驚き怪とあつて宗達ハ罪多し汝亦彼地に在

大正十年八月廿九日寄
本大學出版部
贈

柳巷話説卷之三

死しひふりたるるるりつらうを問ふ七郎二しちろうに去さり尋思しんしと宗達そうたつが
 物ものがうりにほくする常花じょうかがうり又往年おととし妬湯ねとうの怒湧いかげしと今亦いままた妬婦ねぶ塚づか
 の奇怪きがい蛇へびのう燕つばめのう彼是かれこれをわらもくはえぬぐま忍育しのぶ堂どうと丁ていと
 拍是ちやくこれをうりくく入まはり全ぜんく妬婦ねぶがふおほく宗達そうたつがその子のぬに湯女ゆめの往ゆ
 方へと索もとるを妬ねぶく彼親かれおや子こに崇たかへるゆめにして七郎しちろう二にが真まことの冤魂えんこんと
 いわらぬ是これも又また妬婦ねぶの怨うらみ矣や宗達そうたつの歿せつあらせんぬ我われと其許そのこころの
 妻子かみこに向むかひの怪あやしみをうりせしるるるる一ひとこれその真偽まことを証しるすして
 宗達そうたつと討うせし入まはり大おほなる過あやまりたりとて只ただ顧かへみ後悔ごうかいしせめてその
 子こ又また之助しすけを召よりて呼よび領りやう舊ふるのどくひをせん誰たれうら使つかを養やしなふ
 へ死しといふその時とき七郎しちろう二に膝ひざをすくめ其そのえ來きたり宗達そうたつと入まはり断き金の友ともと

ちつらに妬婦ねぶが怨うらみ矣や七郎しちろう二に假かり著つて冤えん枉わう小殺せつせしるるのいを歎なげふ
 ち願ねがふ其使そのつかをうけゆりて又また之助しすけに環會わんかい直ただ小伴せうばんゆて飯いを
 えとのう忍齋しのさい大おほお教おしえ其許そのこころゆりんとるらばりとて其その易やすし日ひな
 らず幾足いくそくありてとて路費ろひるんぞ受うけし子こへし七郎しちろう二に
 飲然きんぜんとて領養りやう一ひと次の日ひ從者じゆうしや只ただ一人ひとりをねとるるる阿坂あさかと
 渡わたり是首このくび彼所かれところと編笠へんがさして又また之助しすけに環會わんかいんとするにきて
 往方ゆくまへい志しまざるなりとて宛石つらひ又また之助しすけの若黨わかしやう八太郎やちろうの辣からめら
 して阿坂あさかを脱だつし出投でしゆてゆくへ死しることも多おほきは只ただ管足くわんそくのすむ
 小まろし伊賀いがの山里やま小縣せうけん居いてその年としをくらし旅路りよ小父せうふの
 喪もも果たまりてとて火多ひたの中なかに携たづりて路銀ろぎんさくおりま

木山巻之三

用尽しといふ小きもすまけき辛し伊賀を志のびぬく
 浪速津まで来たなり。その日、日付さらふ飢へく己工をひきど
 猫向川の西ある商人の家小立よりて食をこむやとあひまづ
 小掛する暖簾とくまば花田の荒布と白く染ぬきて漆器種々
 あり。碗屋久右衛門と字し。その暖簾を押し明てすま入り
 とまハ盤纏さうまひとく飢小迫りし旅人あり。あられ一碗の飯を
 於しあひねと面を死声して音多入バ店の主管と頼りし二年の
 齢四十五六ある男の面を赤く頬髪のゆるげまらるがやうな
 見りてあら思ひし。汝が飢たるにやあつらるる子あり。婦
 の夫にうらわれ獨行の路銀さうまりのるごの物さの常

あり。誰りそまを実言と嘆きさうまのゆねと罵るをやま直六
 久いる死人の亡日あるに物さきらば法於せようといひつ。隔の
 紙門を押し開きて立ち出る。その後家うらええて五十にちうき
 婦あり。その老女握りしる飯を盆に載してさうまを又之助ハ破
 たる扇に受きて向上方笠の内を彼老女熟とさうま親きてといひ
 け。世に似たる人もあつるものうまといひとりごつたぞ。又之助も又と
 こんろうをて汝いふ乳母あり。田井八太郎が母野崎にいわら
 やせり。老女いふ。驚きさうまの推思ゆてましくいふ。こ
 むひくけぞはり。さうま逢ひまあらする。うれくも面をせよ
 けつと。さうまこれさうま零落く面目さけまをすくさうま

お山巻 五二



養子もせず店の主菅直六といひのへらふまゝりて僅四年に及
 べども商賣のこゝろをまきく公をゆくと信守のふするまじく何れもあ
 まうしてはり。ゆゑより推君ふこの家を進らすべし世とあつたよふ
 るまじくあがり商人ふるのひねさるゝと死ハ大宮どのより穿鑿せ
 らるゝも故御人もあひくけざらうづら便よくせはらん。うゝ
 われ夫久右門が世ふめらばむづらうゝあるべきふら子八太郎は生
 死定うららずとせぬれば是のまゝ遺憾として海うちうちそく死口
 説が又之助受て幼きより守育し乳母の親ふをいへば。あ死
 母のふあふ地する執しさいりゆぎも猜せし八太郎が忠美ふ
 愛くこま今父ふらうらまめらせ夫婦が罪を免するまじく舊

主従假そめ親子といひとも何ら厭むん。とせも世ふらうところ
 るのまじく法師とありて父母の菩提を吊ふべくあひらから一度
 父の討とるひし事の邪正を問わし死後の恥辱を雪てこそと
 あひひくしてのまじく本意を遂げらうまじくよれ計らひゆさせよ
 と回答するにぞ野邊のや涙をおさめ直六をほびくひかうこれ
 いまが方の古主めくあつするら家の艱ふくつらひてこの浪速
 ふ家もせしこそ幸るま今よりこの家の主人と冊きまあらま
 べし年を弱き入るまじく信守の仕てゆるたてあひらま
 引うけく後見せよ。こたて汝とこのまじくあひらまのまじく直六はあ
 あがよれ養子をゆのへらこの店長久の基るりと應たり抑この

直六どのへの常花が養父服部團平之件の悪棍往志井を
 津つと澄七と台六を殺して伊勢の国を逐電せしより諸國を流浪し
 四年以前浪速へ来りし野彦が夫久右エ門ハ長病するに由りて
 商賈のるにこそるえしるめのを置く店を守らんとてしつばら
 其人を求めたるころある人團平が算筆小長たるをいふこの
 者あるべしとて媒するとのて團平ハ碗屋の小野とありてその
 名を直六と名を假に老實するをいふしつてゆく程もゆく店の
 主管とありぬあるに今茲主人久右エ門がまゐりて嗣子一子も
 ありしつばら直六ハこの家と相續せんものしとさるるに母ハと云ひ
 て養子の談合るごあくる者ありても竊ふことと阻む野彦

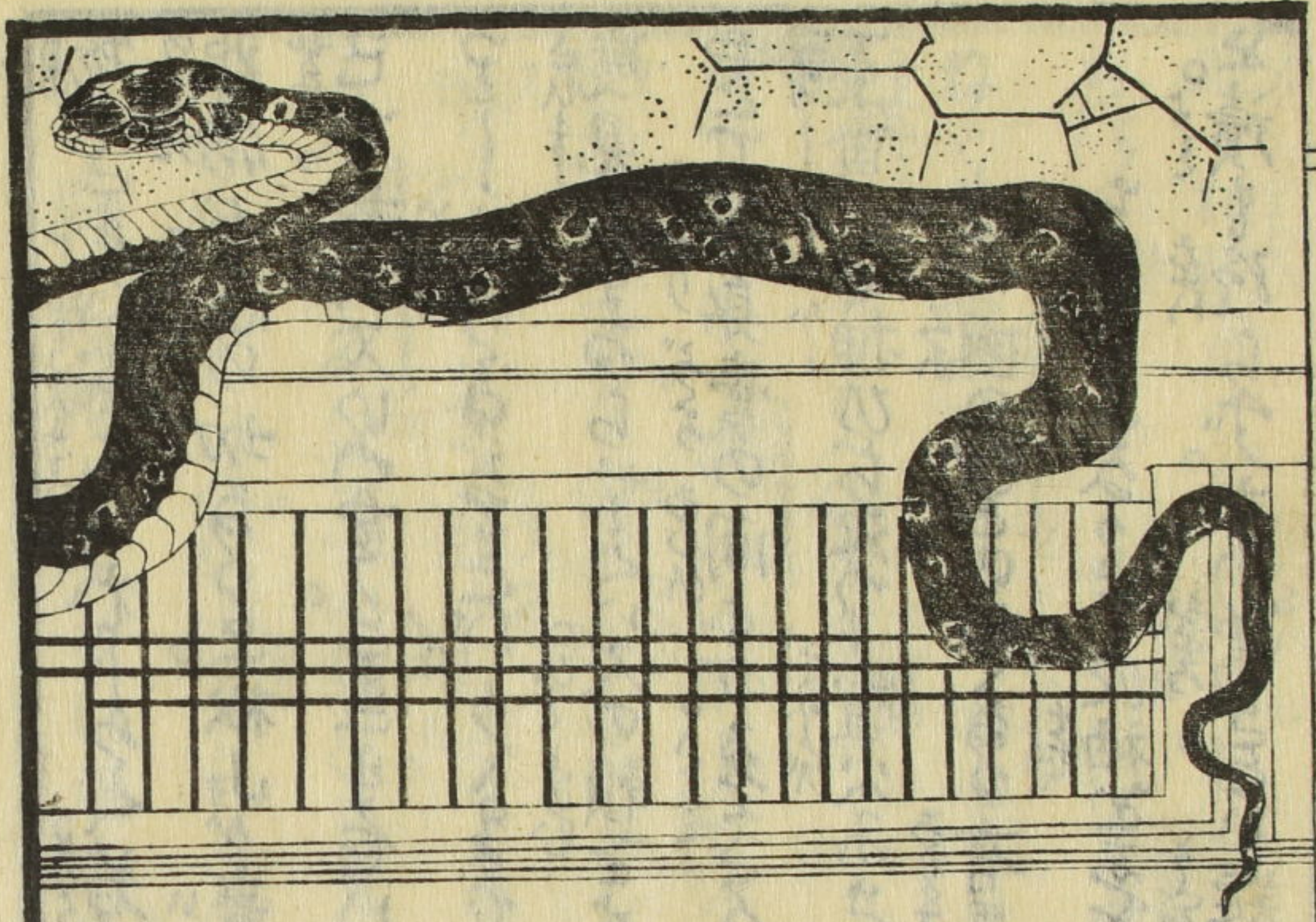
ぬあらせず。いづく信くしげの仕へたるふ入うたるらすがも又之助
 が家を継ごんくうく猖既ふ不良の念を費すよりいともえ未
 類ひる死悪棍らむべしその憤を氣まにゆらハまが。又之助を教
 て他まゐくぞ傳きさる。

奇耦を感ドて碗久松山の感溺す

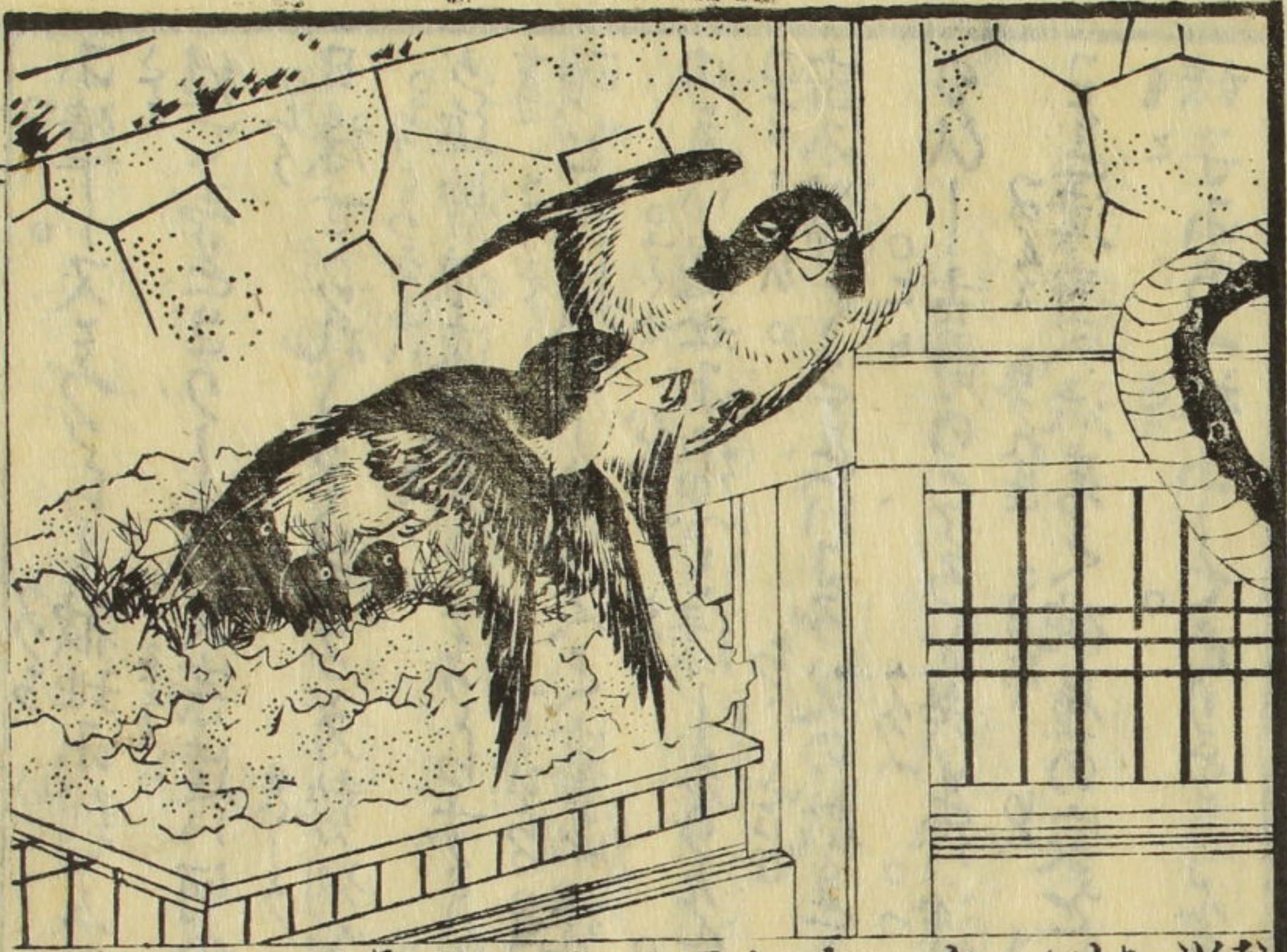
さる程の野彦ハ日とトて又之助を碗屋久右エ門と改名して前
 久右エ門が名蹟しつとと近隣の商人地方の里正小披あしつ
 其西三日ハ是の酒醜彼の饗夜をいといふだハくごでありたる。
 そのと死又之助ハつらく思ふ身う物の前象あるすすて因果の
 道理小遮しつと姓ハ死石氏ゆき乳名ハ又之助ありまゐるふ宛

恥と相語ゆふぞと向ふ松山うち嘆くつが方落ぬゆふこい
 ちづく来ませし情人ゆけりうう宵のうきとを猜しゆい
 ねこのふ一席ある控女あまの理としてこれと羨むも又て
 碗久がふより人のそ集合しうらば侶ある若入あいのまをまた
 がごとくはく碗久の恥をせんとて却面目を喪ひつゝあめく
 せよもよまのゆが遊るがどくふ飯のまをば碗久もゆるまに
 暁るべしをゆふ松山のうらめくをゆめく馳く外方に伴ひぬ
 その時碗久ハ松山に對ひ内方が今宵の款待ハ故とをゆらぬ
 あらせぬ人といふ松山はささひゆのまも理りにゆらうとこの
 ゆるま野橋がまづうららふ事と頼もゆまをゆる縁故の首尾を

物ぐこまば碗久いたどめく若人ホが計較をあらうと大の勢を
 聖橋が土の切あるを松山が意氣地の信ありあるを感激して
 己が松山又いゆうこまをいひまをいひまをいひ見えまおらせ
 こゝ時のゆるまはづくくまをいひまをいひまをいひ思ひはらさ下
 度見えまおらせと人の頼をまろ方にあらず是を誤りのひる
 ちて護身囊の向よりゆるまを短冊二枚をとりより出すを碗久ハ
 本番げゆ押ひらたつ燈火ゆさ一向て是とこままば
 津の國のひとのおくある有馬山ゆりもつんを雲とこま
 ちだりまをくまに袖とまをうらまの松山もことさどい
 と漬もゆるまが大の驚きと疑へくもゆらぬこが父のまゆり



さて八郎身ハ有馬ありまの小湯女こゆめ常花とこはな
 と申らんゆゑありたる今ハ駿うまの
 羊ひつぎと稱して面おもて七しち心こころまませし純まこと牛うし一ひとさ
 よ。こハく奇あま一ひとき再會さいかい之のゆふ
 松山まつやまハ目めと押拭おしぬぐひて元来もとより身みと
 こらハハとハ岩間いわまの温泉いづみ散ちりは
 花はなの浮うきくる意こころをせしゆめあらし
 親おやの許ゆるをせむひくる後のちの信まことを
 まろくひるく。妬湯ねとうの宗むねとて越こ
 の三国さんごくへ賣うりえらるゝ又また浴ゆへて



送おくらして今いまハ浪速なみのりふるがらつる
 川竹かわたけの瀬せハ羊ひつぎハ種しゅままも此君このきみ
 由ゆ多た小こ身みを汚よごさす千辛せんじん万苦ばんくハ
 言ことの多た小こ身み尽つきぬ緑きよのあまはらや
 甲夜よひより面おもてとあハるがら。それ
 うまもありあはさるハ。あめりげ
 ろくほりそく恨うらみと涙なみだあはすれば
 碗わん久ひさハ口くち顧くわんし感涙くわんるいをさあろね
 さてゆねる夏父宗なつちちむね達たちが往むかふひ
 つる事を違ちがへて八太郎やちろうと有馬ありま

小遣り又三つらも彼地小到りて常花が往方とあらんせし小
 終てまじざりし。又宗達ハ何の故ともあらねど有馬より
 日誅せられし。つが勢列を脱出伊賀の山里小隠居る
 近曾浪速に來とまらざるも乳母野添が夫碗屋久右衛門が名
 蹟と相續せし。すべし審小説あらし。さていひやう寔小これと
 内より過世小締る縁より往方ハ父これを許し今又養母
 密小導くまじざりしが父の戲多から。婚縁のあらしとてまへ
 のひー古哥のころを考まじ津の國のひとのちくる有馬山と
 津国ハ流來と碗屋の家と相續し有馬山と契つくる番
 妹子小あし祥小してありまるとまじ雲とまじ門とある下の句ハ

は乃が往方のまじざりしを雲とまじ中一山小喻ハ又一首ハ
 是の互ふ袖とまじつ。まの松山と海とぬる。は乃とまじざりし
 瀬多浪も越しと契つ初る今宵の相語とみ小似たり。心小
 まじ古のあもえと残小むらとまじとひつ。松山ハ恨もまじ
 假初らぬ契を嬉しと通宵來しと行末の物がたりしとまじ
 是妻と結ぶるるべしとて碗ハ飽ぬ後朝小起別とてその後
 言の序に松山が縁故父の許せし妻あるよりを野添小使を
 すと野崎とまじ其奇耦を嘆賞し今とそ世のまじを悼ま
 久後松山どの。年季とまじはえらるるらと妻あハし進らせ
 る父上の宿志と果さしとまじとまじ。おふらとまじのびくつ通ひ

あ人のいひをきき東より上りて旅客の財をこめてついで
松山道のきんをいひ持まひ立地ふ身價して故郷におくゆくと
ありしをこの故より持続と物をもいひき氣をふるにさして野
邊に匿くものご万代までもうららうと契つて入る姫松と入ぬ
根引とありて草の原ゆく父上もさる本意なくおれすらぬ
産業のゆへ衰へ直六もあつせざる一畧の金とゆありこれ
はといふに足らざるべしとまづこの金と燕婆とをやらす遊子
もく彼客を堰ともめ人縦家藏と活却して人も花をいひまはさ
せし事後までいそのうひまへそくそいそぐて賤布のまへ
その出その金とふの且に碗久と直と受ずしていひまう昔いひ

ゆき今この家を続バぬがハ母ありあつを志のこゝろとともく活
業さ衰ぬにりつとこの金とめて松山が男と賺へ死たれと
秘に老と養の料もあつていひつとごとく彼女子が身價せん
といひ客のまはいとら言らねど結び思ぬ縁もらば人力の及
べぬあしを回谷て受る氣をうらへ野邊うさねていひ
ゆるく宜の親族のうらふゆへ親のころに侍らぬを孝行
とぞいふる金銭一旦失へき又得ぬと夫婦の縁中一ト
度竭て更ふ締が難うべし六は男にいひ守りゆめゆら
亡父上の高恩を復へるにこそ美理がましく推辞のみ
ハその親も却て薄く切きより守育する推子も覚ゆるべし

松山道

二二



八ノ巻之三



八ノ巻之三

十七

怨すまは碗久もその志の黙止ぐくてややくふ受あしめし。が
 心の中に思ひやう松山懐胎して既ふ八月に及ぶと胸孕するまは
 ちくまののあわし困るこの件のるふつれては彼も日毎思ひ
 屈し今朝も消息してくや死ん翌やる死人の救ふ入るまを
 ちくま死限をを夢えしぐくくと告るが早の苗の雨ふあてち
 ちくまとちびびるべまぐ一旦の難美を脱且その後いよ
 りもして金をその入母返さるゆへと守思しつややくその
 財布を懐ふしと世移ふゆへやうゆまのりに信くしくはまの志
 の破るぐくまふこの金とめて花街ふ到り燕婆々に通子して
 松山も安堵さしゆしまご甲夜るるに雨さ入宵より路のぼも

公易く思ひゆるといひ果て忙しく出んとするに世移の挑灯火
 をうしつ碗久も通子しまらへ今宵はどくゆはく翌ハ朝も死
 に飯つる人ぞく端近う目送つ店の角門鎖くゆめ又のどげは
 納まへ入るるあくるに此夜直六ハ物蔭ハ竊圖一件の五十二を
 満面ハ笑とらる今この家ゆへ問九の借錢と金籠
 の蜘蛛の網の外糸を物りしと思ひつるふ古川ゆへ水もこまを
 の常言ハ違さりし遠ゆて彼金を奪ひとらるりか方の行末を
 圖らるハ終雨喪家の物もあるべしとハ死ゆのをこんこりて歡び
 て背戸口より走り出花がどくくに追蒐り碗久ハうきも知
 らざ今宵もこまをまら山ゆりの容子を告あらしめて終世ハ

と思ふも常より八足もすみて長堀を過る折も誰か来らず
 と拭いてふく頬ふつと一なる大男跡より跟来りん橋をさ
 らんとするまた衝を走りつと挑灯をた落せば碗久らる駭
 きてこまはころと向真額を握堅ゆ一拳ゆて碎るむろ礫と
 おひるむまろと飛りつと懐小をさ一入金財布を奪
 と掻爬て奪ひ去らんとあつらへ碗久ハ臥つても奴は携て
 舟を起し逃さしと引ぬれ舟は断れ二歩三歩ぬれ
 後方によろめきつと又走ると癖者が突出す臂の膳をり
 くおせそく忽地の槌と棒ふとん入りもせと堀小深ひ橋を過
 りと驚直の逃ん幸う時小編笠ふくまらる武士嚮より橋の柵

干に舟を倚てその体と窺ひ居りて目今癖者が弱人を
 たりて金を奪ひ去るをりて行死くふ立塞と癖者ハのぞ
 せず袂の下と潜ゆく襟上とろと引ゆすとろ拂ひつおと
 うるその身を背へ探揚そ輒く金とろ復せばその隙に碗久ハ
 中氣と落めく起くる砂小塗ま一膝の上へ投ふる件の財布
 目物ながら押載き思ひもくけぬ情の助太刀をも何人あておハ
 するごとと同せも果す声と低し仔細のまハ名告るふ及びすと
 音すととくくとのふゆりぬ當坐の礼謝あつらばよれとむろ
 つふ月ま曇る甲夜の雨も憂長堀の禍と濡る裳を引揚て
 夏を好まる潜び路のあつらあまる道横びりて走去とバ遣

井安茶貸

らうと目搔く癖者を彼人ハるハ動かせず力の提緒抜とて癖
癖と縛るは拭口小たますまバ豫之暗号定め先於巾目深ま
たる老女一挺の轎を扛しハる近く歩ませ送小密語点改つ
癖者と引立まきり多く轎小乗すると存一ノ諸肩入る轎夫の
けし声高く春の夜の越路へ飯る確かねらせまも花街へ急
がしぬ。

柳巷話説卷之三

